

短期留学生のための日本語教材開発（初級レベル）
Developing Japanese Language Teaching Materials
for Short-Term Exchange Students（Elementary Level）

平田真美（国際交流センター・准教授）

HIRATA Manami（Center for International
Exchange・Associate Professor）

1997年度後期より開始された日本語研修コース、及び2001年度後期より開始されている短期留学プログラム（以下STEPSと略す）では、集中日本語コースを開設している。毎学期、コース半ばに中間インタビューを行い、また学期末に「日本語コースアンケート」を実施し、直に学習者の声を聞いている。（アンケート結果は、国際交流センター『年報』に掲載）その結果、学習者が目標言語である日本語を「話す」技能を上げることが望んでいることが明らかとなっている。そのニーズに応えるような教室活動を取り入れる努力を続けているのであるが、「もっと話す練習をしたい」という声は鳴り止まない。学習者はどのような教室活動を期待しているのであろうか。初級レベルの学習者が教室の外で目標言語である日本語を使う場合、どのような状況で誰とコミュニケーションをとろうとしているかを知り、日本語教材開発につなげる必要がある。

2006年度前期と後期に、国際交流センター集中日本語コース（Aクラス・初級前半レベル）で学習している留学生を対象に、中間インタビューを実施する際、同時に「会話」に関するインタビューを行った。事前に次の二つの質問をすることを予告しておき、回答してもらった。（口頭で回答してよしとしたが、書いて準備してきた学習者もいた。）

質問1. あなたは教室の外で、どんな場面で、誰と、何について日本語を話しますか。

質問2. 教室でどんな“話す練習”をしたいですか。

以下に結果を報告する。

1. 調査結果

(1) 留学生が教室外で日本語を話す時の①相手、②トピック、③場面

- ①相手：ホストファミリー、日本人の友達、クラブ（埼玉大学）の学生、指導教員
店の人
- ②トピック：天気、食べ物、家族、両親、友人、料理、音楽、映画、旅行、勉強、
ボーイフレンド・ガールフレンド、自国と日本の文化の違い
- ③場面：レストラン・バー・マクドナルドなどで食べ物や飲み物を注文する
スーパーで商品について聞く、道を尋ねる、駅で駅員に聞く、
スポーツクラブで運動メニューについて聞く、タクシーで道を指示する、
病院で医者に病気について話す、アルバイト先で同僚と話す

(2) 教室における外国語学習の「話す」練習（どのような練習をしたいか）について

- ・現実的な実生活をイメージした場面でのゲーム
- ・行ったことのある場所について詳しく描写する、旅行について話す
- ・学習を面白くするため、最新のトピックについて話す

- ・フリーディスカッション
- ・週末の話をする
- ・ロールプレイ
- ・スピーチ
- ・ゲーム、連想ゲーム、言葉遊び
- ・友人同士の会話
- ・自分の感情を表現する方法

2. 結果の分析

(1) コミュニケーションの相手、トピック、場面

インタビューは、来日後およそ2か月が過ぎた頃（集中日本語コース開始後、約6～7週間経過した時期）に実施した。日本語能力は初級前半程度であるが、日本語が使われている社会で生活していれば、日本人とコミュニケーションをとりたい、また当然その必要性を感じるであろう。

留学生達は、同世代の学生だけではなく、指導教員やホストファミリーなど、自分より年齢が上や下の人達とも話す機会を持っている。また何か助けが必要であれば、通りがかりの人や店の人、駅員などとも話すことになる。関係が「親」である人間のみならず、「疎」の関係の人間ともコミュニケーションを取っている。

トピックは多岐にわたっているが、趣味・嗜好など自分自身について、また身近な人（家族や恋人）についての話題が話し易いのであろう。ホストファミリーや友人など、親しい人と話す時には、語彙や表現を教えてもらいながら、知っている文型を駆使して話すのではないだろうか。また異なる文化圏で生活していると、自国の文化との違いに気づくことが多いものである。初級レベルの日本語では、まだ議論に至るまでは行かないが、そのような文化の相違も話題となるようである。

学習者が日本語を使う場面、その状況で自分が何をしようとするかの具体例が出た。疑問を解決するために質問する、助けを求める、状況を説明し何かを要求するなど、日常生活の様々な場面で日本語を話す必要性があることが分かる。

(2) 教室活動

教室での「話す」練習については、これまで学習者が経験してきた外国語学習に基づいた意見などが出され、ロールプレイやゲーム等、さまざまな教室活動があげられた。その中で、場面や役割を設定するロールプレイなどは、教室の外での学習者のコミュニケーション活動につながる練習となり得るであろう。通常、初級レベルでは、「親疎」に関わらず、どのような人間関係においても失礼になることのない「丁寧体（です・ます体）」をまず教え、それを使うように指導している。しかしながら、学習者達は、同世代の友人達と話す時、「丁寧体」を使うことで人間関係に距離感を感じのかもしれないが、「普通体」での会話練習を期待していることが窺える。

特に同世代の友人達と話す時などには、世の中で話題になっていることがテーマになるのは自然である。学習者は教室でも、さまざまなテーマについて話す練習をすることを希望している。初級レベルの場合、自分自身の経験を話す、あるテーマについて話すためには、教科書にある語彙だけでは十分ではなく、関連語彙を教える必要がある。教える語彙を増やすことは、教師の立場からは「学習者の負担が増える」と考えがちであるが、学習者の方には「必要な語彙を知りたい」という願望があり、それは負担ではなく、役に立つと考えて良いようである。

3. おわりに

2006年度前期・後期に日本語集中コースに在籍した学習者を対象に行ったインタビュー結果により、学習者のニーズが少し見えてきたところである。今後も引き続き「会話」に関するインタビューを行ない、短期留学プログラムの学生達が求める学習につながる日本語教育を目指していく。現在出版されている日本語教育の教材分析も行ない、短期滞在者に必要な学習のうち、何が欠けているかを探り、独自の教材作成に結びつけたい。